

マルクスの統計の一面：『資本論』における英国農業労働者賃銀

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4475357>

出版情報：経済学研究. 50 (1/2), pp.93-117, 1984-09-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



マルクスの統計の一面

——『資本論』における英国農業労働者賃銀——

福 留 久 大

目 次

1. 錯 誤 の 訂 正
2. 変 転 の 軌 跡
3. M E G A 版

1. 錯誤の訂正

針の孔をのぞいてみる

人間は意義を喰わねばならない動物である、
と言う。確かに、有意義なことを追い求め、意
味不明なことを忌避するのが、人の常である。

このような人間の性質は、著述の実際におい
てもしばしば見受けられるところである。たと
えば、自己の见解を展開する本文部分について
は、その重要性を認めて、細心の注意を配りな
がら執筆する、だが、その主張を裏づける統計
数字については、付属的価値しか認めずに、等
閑に付す、という事例である。読者の側でも、
著述された議論の筋を追うのには熱心でも、そ
の議論を支える統計数字にまで丹念に目を通す
ことは稀である。そのために、誤まった表示や
意味不明の数字が記載されることになり、さら
に長年月にわたって訂正されないままに、再生
産されることにもなる。

ここでは、『資本論』における一例を紹介し
てみたい。著者マルクスが原表を転写する際に
不注意により誤りをおかしたか、あるいは転写
する際には正確でもその後の印刷段階で誤植が
生じたか、そのいずれかのために、誤った数字
の表記がなされたと考えられる例である。この
例においてはマルクスは出典を明記しているの

であるから、原表を一覧して訂正するに何ほど
の困難もないと思えるにもかかわらず、ドイツ
語による各版でも、また各国の翻訳版でも、誤
りを繰り返して、種々の混乱を惹起しているの
である。

以下、筆者の書くことは、すべて趣味に墮
し、針の孔目をのぞくがごとき好事詮索に陥る
こと必定である。従って、経済学的には何ほど
の意味も有しえない話題であるが、しかし、人
間の性情のある一面を知るには、多少の価値を
有する挿話にはなりうるであろう。

二組の泥棒が喧嘩する

『資本論』第1巻「資本の生産過程」第7編
「資本の蓄積過程」第23章「資本主義的蓄積
の一般的法則」第5節「資本主義的蓄積の一般
的法則の例解」e「イギリスの農業プロレタリ
アート」のなかで、マルクスは次のような文章
を記している。

「穀物法廃止の直前の時代は、農村労働者
の状態に新たな光を投げかけた。一方では、
ブルジョアの煽動家たちが関心を持ったの
は、あの保護法がどんなにわずかしき現実の
穀物生産者を保護しなかったかを証明するこ
とだった。他方では、工業ブルジョアジー
は、土地貴族の側からの工場状態の非難につ
いて、——この根本的に腐敗した無情で紳士
ぶった怠け者の、工場労働者の苦悩にたいす
る見せかけの同情や、工場立法にたいする彼
らの‘外交的熱心’やについて、憤怒に沸き
たっていた。二人の泥棒が喧嘩すれば必ず何

か良いことがおこる、というのは、イギリスの古い諺である。そして事実、両派のいずれが労働者を最も破廉恥に搾取するかという問題を巡る支配階級の両分派の騒々しい激越な喧嘩口論は、いずれの側においても真理の助産婦となった。シャフツベリー伯、別名アシュリー卿は、貴族の反工場的博愛戦における急先鋒であった。そのため彼は、1844年から1845年にかけて、農業労働者の状態に関する“モーニング・クロニクル”紙の暴露記事のなかで、愛好の題材となっているのである。当時最大の勢力をもつ自由党機関紙だったこの新聞は、農村地方に特派員を送った。この特派員たちは、一般的な記述や統計に満足せずに、調査した労働者家族だけでなくその地主の姓名をも公表した。次の表は、ブラ

ンフォード、ウィンバーンおよびプールという近接3箇村落で支払われた賃銀を示すものである。これらの村落は、G. バンクス氏とシャフツベリー伯との所有に属している。この‘低教会派’の法王、このイギリスの敬虔派の頭目が、バンクス氏と同様に、労働者の賃銀のうちから、再び相当の部分を家賃という口実で奪い返していることが認められるであろう。」

マル・エン全集をみる

上の文章に出ている「次の表」が問題である。現行のマルクス・エンゲルス著作集、所謂マルクス・エンゲルス全集 (MARX-ENGELS WERKE) の第23巻にあたる『資本論』第1巻で、農業労働者の賃銀と家賃に関する「次の表」を見ると、次の表Aの通り。

—表A— (原表一付表1)

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		sh.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1 6	10 6	2 —	8 6	1 ¾
3	5	7	2 —	7 —	1 4	5 8	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	1 6	10 —	1 6	8 6	1 ¾
6	8	7	1 6	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	2 —	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	2 6	5 —	1 —	4 —	2 —

(注146) 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日号、290頁。

二種類の疑問が生ずる

この表でマルクスは、第一村落 6 家族、第二村落 5 家族、第三村落 3 家族、合計 14 家族をとりあげて、各々に(a)児童、(b)家族構成員、(c)大人週賃銀、(d)児童週賃銀、(e)全家族週収入、(f)週家賃、(g)家賃差引後の週賃銀、(h)一人当たり週賃銀、という 8 項目の数字を掲げている。いま、第一村落第一家族を例にとれば、子供が 2 人(a)、大人が 2 人で家族構成員は 4 人(b)、大人が得る週賃銀 8 シリング(c)、子供は働きに出ておらず週賃銀はゼロ(d)、従って全家族の収入は 8 シリング(e)、そのうちから支払う週家賃が 2 シリング(f)、そこで家賃差引後の週賃銀残額は 6 シリング(g)、この残額を家族構成員数 4 で割って ($6 \text{ シリング} \div 4 = 1.5 \text{ シリング}$, $1 \text{ シリング} = 12 \text{ ペンス}$)一人当たり週賃銀は 1 シリング 6 ペンス(h)と読める。

こういう理解の仕方では第二番目以下の家族を順次見ていくと、疑問の生ずる個所が幾つか目に止まる。その疑問は、二種類に纏めることが出来るであろう。

第一の種類は、家賃差引後の残額(g)を家族構成員(b)で割って得られる一人当たり週賃銀(h)にかかわるものである。たとえば、第二番目の家族についていえば、家賃差引後の残額 6 シリング 6 ペンス(g)を家族成員数 5 (b)で割って、一人当たり週賃銀(h)は 1 シリング 3 $\frac{3}{5}$ ペンスと計算

されるはずである。しかし、マルクスの表では 1 シリング 3 $\frac{1}{2}$ ペンスと記されており、わずかながら食い違いが生じている。同様のことは第六番目の家族、第二村落第二番目、第三番目、第四番目および第五番目の家族、第三村落第二番目の家族に関しても認められるところである。計算の結果とマルクスの表記を並列してみると、次の表 U のようになる。

ただこの小さい差異については、マルクスの表記の数字は概数であると考えれば理解はし得る。特に貨幣単位としては 2 分 1 ペニィや 4 分の 1 ペニィが便利であることを考えるとき、5 分の 3 ペンスに代えて 2 分の 1 ペニィを用いるとか、16 分の 9 ペンスの代わりに 2 分の 1 ペニィを使うというのは、合理性さえ有するとも言える。 $6\frac{17}{20}$ ペンスを 7 ペンスと書くのも、 $10\frac{11}{12}$ ペンスを 11 ペンスと表すのも、 $1\frac{1}{10}$ ペンスをただ 1 ペニィとして済ますのも、そう考えれば了解しうるだろう。

第二の種類は、大人の週賃銀(c)と子供の週賃銀(d)との合計としての全家族の週収入(e)に関係する。第一村落第五家族についてみると、大人週賃銀 7 シリング(c)と児童週賃銀 1 シリング 6 ペンス (d)を加算した全家族週収入 (e)は、8 シリング 6 ペンスとなるはずであるが、マルクスの表では 10 シリング 6 ペンス と、2 シリングだけ大きく書かれている。第六家族で

—表 U—

	(g)÷(b)=(h) 計算結果	マルクスの表記
第 1 村落 第 2 家族	6sh. 6d. ÷ 5 = 1sh. 3 $\frac{3}{5}$ d.	1sh. 3 $\frac{1}{2}$ d.
第 1 村落 第 6 家族	5sh. 8d. ÷ 5 = 1sh. 1 $\frac{3}{5}$ d.	1sh. 1 $\frac{1}{2}$ d.
第 2 村落 第 2 家族	5sh. 8 $\frac{1}{2}$ d. ÷ 8 = 8 $\frac{1}{16}$ d.	8 $\frac{1}{2}$ d.
第 2 村落 第 3 家族	5sh. 8 $\frac{1}{2}$ d. ÷ 10 = 6 $\frac{17}{20}$ d.	7d.
第 2 村落 第 4 家族	5sh. 5 $\frac{1}{2}$ d. ÷ 6 = 10 $\frac{11}{12}$ d.	11d.
第 2 村落 第 5 家族	5sh. 5 $\frac{1}{2}$ d. ÷ 5 = 1sh. 1 $\frac{1}{10}$ d.	1sh. 1d.
第 3 村落 第 2 家族	10sh. 8d. ÷ 5 = 2sh. 1 $\frac{3}{5}$ d.	2sh. 1 $\frac{1}{2}$ d.

は、7 シリング (c) と 2 シリング (d) の合計が 9 シリングではなく、2 シリングだけ小さい額の 7 シリングとなっている。同様の食い違いは、第二村落第一家族および第二家族にも、第三村落第二家族および第三家族にも認められるところである。計算結果とマルクスの表記を対比すると、次の表 V に示す通り。

このように列記してみると、二つの事柄が読み取れるであろう。一つには、それぞれの村落

において、一方の家族が大きく表現されている額だけ他方の家族は小さくなっていて双方の差異は丁度相殺しあう形になっているということであり、二つには、その差異額はいずれも児童週賃銀の一つに一致しているということである。そして、これらの事柄は、第一村落でいえば、第六家族のものとして表記されている児童週賃銀が実は第五家族に属し、同様にして第二村落の場合、第二家族の分が第一家族に、第三

—表 V—

	(c) + (d) = (e) 計算結果	マルクスの表記	差 異
第 1 村落 第 5 家族	7sh. + 1sh. 6d. = 8sh. 6d.	10sh. 6d.	+2sh.
第 1 村落 第 6 家族	7sh. + 2sh. = 9sh.	7sh.	-2sh.
第 2 村落 第 1 家族	7sh. + 1sh. 6d. = 8sh. 6d.	10sh.	+1sh. 6d
第 2 村落 第 2 家族	7sh. + 1sh. 6d. = 8sh. 6d.	7sh.	-1sh. 6d
第 3 村落 第 2 家族	7sh. + 2sh. = 9sh.	11sh. 6d.	+2sh. 6d
第 3 村落 第 3 家族	5sh. + 2sh. 6d. = 7sh. 6d.	5sh.	-2sh. 6d

—表 B—

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		sh.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	3 6	10 6	2 —	8 6	1 ¾
3	5	7	— —	7 —	1 4	5 8	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	3 —	10 —	1 6	8 6	1 ¾
6	8	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	4 6	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	— —	5 —	1 —	4 —	2 —

(下線部分は変更個所を示す。)

マルクスの統計の一面

—表C— (原表—付表2)

児 童 a	家族成 員数 b	大人週賃銀 c		児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f		家賃差引後の 週賃銀 g		一人当たり 週賃銀 h		
第 一 の 村 落												
		s	d		s	d	s	d	s	d		
2	4	8	0	1, 1s6d; 1, 2s	8	0	2	0	6	0	1	6
3	5	8	0		8	0	1	6	6	6	1	3½
2	4	8	0		8	0	1	0	7	0	1	9
2	4	8	0		8	0	1	0	7	0	1	9
6	8	7	0		10	6	2	0	8	6	1	0¾
3	5	7	0		7	0	1	4	5	8	1	1½
第 二 の 村 落												
6	8	7	0	1, 1s6d; 1, 1s6d	10	0	1	6	8	6	1	0¾
6	8	7	0		7	0	1	3½	5	8½	0	8½
8	10	7	0		7	0	1	3½	5	8½	0	7
4	6	7	0		7	0	1	6½	5	5½	0	11
3	5	7	0		7	0	1	6½	5	5½	1	1
第 三 の 村 落												
4	6	7	0	1, 2s; 1, 2s6d	7	0	1	0	6	0	1	0
3	5	7	0		11	6	0	10	10	8	2	1½
0	2	5	0		5	0	1	0	4	0	2	0

村落の場合、第三家族の分が第二家族に帰属するというのが実際の姿ではないか、と推測せしめることになる。

こういう推測に基づいて、大人の週賃銀(c)と子供の週賃銀(d)との合計としての全家族の週収入(e)を算出してみると、表Bに示すように不一致箇所は消える。それだけでなく、全体としても平仄の合う表が出来上がるのである。

エコノミスト誌を見る

以上のように、児童週賃銀と一人当たり週賃銀とについて推測を重ね、児童週賃銀について修正を加えることによって、マルクスの表は一応理解出来ることになった、と言えよう。だが、その推測が正しいか否か、正しいとするならマルクス（ないし植字工）は何故間違えたのか、それを知るには、注記にある「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日号290頁に遡

るほかない。その表を表Aに対応した形で示すと、表Cのようになる。

正確平明な表記にする

この「ロンドン・エコノミスト」の表を見ることによって、我々の推測が正しかったことを確かめ得ると同時に、マルクス（ないし植字工——以下植字工は省略）が誤りを生じた理由も把握できるであろう。まず、一人当たり週賃銀についてみると、「エコノミスト」も概数による表記を用いている。その点ではマルクスの表記に間違いはない。次に児童週賃銀についてみると、「ロンドン・エコノミスト」は、実に紛わしい表記方法を採用しているのであって、第一村落第五家族に例を求めると、6人の子供の中で2人が就労していて、1人は1シリング6ペンスを得、他の1人は2シリングを稼いでいることを示すのに（1, 1s6d; 1, 2s）——という

不自然な形式を用いている。マルクスは、前の方の 1 シリング 6 ペンスを得た子供だけが第五家族に属するものと錯覚したのであろう。そして後の方の 2 シリングを稼いだ子供は第六家族に含まれるものと誤解したのであろう。そういう錯覚と誤解が、第一村落第五家族と第六家族の間だけでなく、第二村落第一家族と第二家族の間についても、第二村落第二家族と第三家族の間についても、引き起こされたのであろう。

マルクスが図書館に通った頃には、無論複写機などはなかった。忙しく筆写しなければならなかった訳であるが、この「エコノミスト」の正常でない記述法は、余程の注意を以てしない限り、人を錯覚と誤解に導きがちであったろう、と考えられる。仮に筆写の際には過ちを避

け得たとしても、筆写の後で帳面に基づいて原稿を作成するときに、そういう錯覚や誤解の生ずることは、蓋し神ならぬ人間の完全には避けえないところと言わねばならないであろう。従って、ここでは、マルクスに対する非難の意図は微塵も無い。むしろここでは、マルクスもまた過ち易い人間の一人であったということ、従って我々の手の届かない遠い存在ではないということ、そういう事柄を実感し得るひとつの縁にでもなり得るならば幸い、と念ずる気持ちが強い。

そこで、一方ではマルクスの錯覚と誤解に基づく間違いを訂正するという観点から、他方では「エコノミスト」の実に紛らわしい記述法、到底正常とは考えられない記述法を平明なもの

—表 D—

児 童 a	家族成 員数 b	大人週賃銀 c		児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f		家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h	
第 一 の 村 落										
		s	d		s	d	s	d	s	d
2	4	8	0		8	0	2	0	6	0
3	5	8	0		8	0	1	6	6	6
2	4	8	0		8	0	1	0	7	0
2	4	8	0		8	0	1	0	7	0
6	8	7	0	<u>1s6d+2s</u>	10	6	2	0	8	6
3	5	7	0		7	0	1	4	5	8
第 二 の 村 落										
6	8	7	0	<u>1s6d+1s6d</u>	10	0	1	6	8	6
6	8	7	0		7	0	1	3½	5	8½
8	10	7	0		7	0	1	3½	5	8½
4	6	7	0		7	0	1	6½	5	5½
3	5	7	0		7	0	1	6½	5	5½
第 三 の 村 落										
4	6	7	0		7	0	1	0	6	0
3	5	7	0	<u>2s+2s6d</u>	11	6	0	10	10	8
0	2	5	0		5	0	1	0	4	0

(出典) 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日号、290頁。
(下線部分が訂正箇所を示す。)

に改めるという観点から、本来あるべき姿の表記によって、新しい表を作成してみたい、と考える。その際、肝心な点は、改めて言うまでもなく、児童週賃銀を正確に、そして理解に容易なように、表記することに在るであろう。そういう配慮の下に作成したのが、表Dである。

こうしてみると、実に単純で平凡な表である。それが、原表作成者の不注意と読む人の錯覚とが絡み合って、実に分かりにくい表になってしまったのである。

2. 変転の軌跡

四種類の表記を並べる

以上において、現行のマルクス・エンゲルス

全集版『資本論』掲載の表記が、原典である「ロンドン・エコノミスト」の表記と如何に食い違っているか、その食い違いは如何にして生まれたか、について、見てきた。しかし、細かく考えると、現行のマルクス・エンゲルス全集版『資本論』がマルクスの記述した通りの姿を維持しているという保証はないのであって、幾人もの編集者の手が加えられることによって、変化が生じている個所も存在する。いま、問題としている表記についていえば、正にそうであって、初版『資本論』の表記は、現行のマルクス・エンゲルス全集版『資本論』のそれとは同一ではない。だがそのことは、『資本論』初版の表記が、原典に即した正確なものであったこ

—表E— (原表—付表3, 4, 5)

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		sh.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1 6	10 6	2 —	8 6	1 ¾
3	5	7	1 2	8 2	1 4	6 10	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	1 6	10 —	1 6	8 6	1 ¾
6	8	7	1 6	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	1 2	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	1 6	5 —	1 —	4 —	2 —

(注 146) 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日号, 290頁。

(Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band.; Erste Auflage, 1967, S. 665

; Zweite Auflage, 1872, S. 705-706.

; Dritte Auflage, 1883, S. 698. ただし第三版では、第一村落第五家族の一人当たり週賃銀が1sh. ¾d. となっている。)

—表F— (原表—付表6)

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		sh.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 6	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	2 6	10 6	2 —	8 6	1 0¾
3	5	7	2	8 2	1 4	6 10	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	2 6	10 —	1 6	8 6	1 0¾
6	8	7	2 6	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	3	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	3 6	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	3 6	5 —	1 —	4 —	2 —

(注 146) ロンドン・エコノミスト, 1845年3月29日, 290頁。

(Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Vierte Auflage, Herausgegeben von Friedrich Engels, 1890, S. 642-643)

とを意味するのでもない。『資本論』初版の表記は、マルクス・エンゲルス全集版のそれとは別の形で「ロンドン・エコノミスト」の表記を誤写している。そして、この誤写された表記が、二版(1872年)、三版(1883年)まで基本的には同じ形で維持されている。ただし、三版では、第一村落第五家族の一人当たり週賃銀が1sh. ¾ d. となっている点だけは相違がある。その後、四版(1890年)において、エンゲルスによって、再び別の誤った形で表現されることとなった。20世紀に入ってから、いわゆるカウツキー版(1914年)に、第三の誤った形での表記が現れた。次いで、モスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所の編集になり、序文を同研究所の所長アドラツキーが書いた、い

わゆるアドラツキー版あるいは研究所版(インスティット版)が1932年に登場するが、ここでもまた、いま一つ異なる形での表記が示されている。こうして、現行マルクス・エンゲルス全集版まで数えると、五つの種類の何か間違いを含んでいる表が存在することになる。全集版の表記は、先に表Aとして示したので、残り四つの表記をならべてみることから、始めよう。表Eは、『資本論』初版、二版、三版に共通するもの、錯覚個所はマルクスの責任と考えられる。表Fは、第四版以降の、いわゆるエンゲルス版に見られるもの、エンゲルスの添削した部分に間違いが認められる。表Gは、カウツキー版からで、過ちは無論カウツキーの筆に基づく。表Hは、アドラツキー版の表記に対応す

マルクスの統計の一面

—表G— (原表一付表7)

児 童 a	家族成 員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		Sh.	Sh. p.	Sh. p.	Sh. p.	Sh. p.	Sh. p.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1Sh. bis 1Sh6p	10 6	2 —	8 6	1 ¼
3	5	7	1Sh 2p	8 2	1 4	6 10	1 7½
第 二 の 村 落							
6	8	7	1Sh bis 1Sh6p	10 —	1 6	8 6	1 ¾
6	8	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	1Sh bis 2Sh	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	— —	5 —	1 —	4 —	2 —

(注 146) 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日, 290頁。

(Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Volksausgabe, Herausgegeben von Karl Kautsky, 1914 S. 612)

るもので、研究所およびその所長アドラツキーの努力にもかかわらず、なお過ちは払拭されていない。各表記のなかで下線部分は、大本の「エコノミスト」の表記との食い違い個所を示すものである。

マルクスがまず誤った

表Eに即して、マルクス自身の錯覚の跡を探って、「ロンドン・エコノミスト」の表記が如何に写しとられているか、主な相違点を挙げておきたい。その際、賃銀などの事項はa, b, c等の符号で以て表示する。

『資本論』初版 (1867年)

- (1) 第一村落 第五家族・d—1sh. 6d.
- (2) 第六家族・d—1sh. 2d.;
e—8sh. 2d.; g—6sh. 10d.

- (3) 第二村落 第一家族・d—1sh. 6d.
- (4) 第二家族・d—1sh. 6d.
- (5) 第三村落 第二家族・d—1sh. 2d.
- (6) 第三家族・d—1sh. 6d.

マルクスは、ここでは第一村落第五家族に属すべき d—1sh. 6d., 2sh. を、前者だけ第五家族に算入して、後者は第六家族に含めるという失敗をしている。しかも、「エコノミスト」は、1人が 1sh. 6d., 別の1人が 2sh. の賃銀を得ているという意味で、(1, 1s6d; 1, 2s) と紛らわしく書いているため、マルクスは、後者を 2sh. と読まず、1sh. 2d. と読んで写し間違っている。そのうえで、e, gについて、c+d=e, および e-f=g の計算を試み、(7sh.+1sh. 2d.=8sh. 2d) (8sh. 2d—1sh.

—表H— (原表—付表8)

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人当たり 週賃銀 h
第 一 の 村 落							
		Sch.	Sch. p.	Sch. p.	Sch. p.	Sch. p.	Sch. p.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1-1 6	10 6	2 —	8 6	1 ¼
3	5	7	1-2 —	7 —	1 4	5 8	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	1-1 6	10 —	1 6	8 6	1 ¾
6	8	7	1-1 6	7 —	1 3½	5 8½	— 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	— 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	— 1
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	1-2 —	11 6	— 10	10 8	2 1½
0	2	5	1-2 6	5 —	1 —	4 —	2 —

(注 146) 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日, 290頁。

(Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Volksausgabe, Herausgegeben von Friedrich Engels, Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, 1932, S. 713-714)

4d.=6sh. 10d.) という計算結果に基づいて「エコノミスト」の e—7sh. 0d. を 8sh. 2d. に, g—5sh. 8d. を 6sh. 10d. に変更している。しかし, そう変更してみても前後の辻褄は合わないのであって, マルクスもそれ以上に数字を動かす試みを放棄して, 他の個所は「エコノミスト」の表のままにしている。(原表—付表3)

『資本論』二版 (1872年)

ここでは, 初版と全く同様の表記がなされている。したがって, 上記のことに付け加えるべきものは, 存在しない。この版が, マルクス存命中に刊行された最後のドイツ語版である。生前のマルクスは, 初版の時だけ数値の不整合性に多少注意を払ったのであるが, 二版において

は無関心のまま放任に終始したように見受けられる。(原表—付表4)

『資本論』三版 (1883年)

ここでは, 付表5の通り, ただ一点だけ, つまり第一村落第五家族の一人当たり週賃銀が 1sh. ¾d. でなく, 1sh. ¼d. となっている点だけが, 初版, 二版と異なる。¾d. を ¼d. と誤植したのであろう。その他の点では, 初版と, したがって二版とも, 同様の表記がなされている。マルクスは 1883年3月14日永遠の眠りについた。第三版の準備はマルクスによっては一部分しか成されず, 殆どの準備と全部の校正はエンゲルスの手によって実施された (1883年11月7日付エンゲルス第三版序文)。マルクスのみならずエンゲルスもまた, この表記の間

違いに注意を払うことはなかったようである。

(原表一付表5)

エンゲルスも錯覚した

表Fは、いわゆるエンゲルス版からであるが、この表記を細かく見ることによって、エンゲルスの努力を重ねた事情、およびそれにもかかわらずなお錯覚を免れ得なかった事情を読みとることが出来るはずである。

『資本論』四版(1890年)

この版はエンゲルスによって校閲された最後のものであり、通常、編集者に因んでエンゲルス版、あるいは出版者に由来してマイスナー(Otto Meissner)版と呼ばれるものの決定版となった。つまり、第五版(1903年)、第六版(1909年)、第七版(1910年)、第八版(1919年)、第九版(1921年)、第十版(1922年)——エンゲルス版はこれを以て絶版になったと考えられる——は、いずれも第四版を覆刻したものにすぎない。

この第四版を編集するにあたって、エンゲルスは、「本文ならびに脚注を出来るだけ最終的に確定すること」に努め、特に1887年に刊行された英語版で「マルクスの末娘エリナが引用された箇所全部を原文と比較する労をとってくれた、……したがって、この原文を第四版で参考にすることを、私の責務とした」と言う(1890年6月25日付エンゲルス「第四版のために」)。

しかしながら、いま問題にしている表記に関する限りでは、エンゲルスは、後述のような英語版にエリナの労によって加えられたと考えられる変更点を活かし得なかったというにとどまらず、次のように第三版までに生じていた表記の間違いを拡張してさえいる。

(1) 第一村落 第五家族・d—2sh. 6d.;

h—1sh. 0¼d.

(2) 第六家族・d—2sh.;

e—8sh. 2d.; g—6sh. 10d.

(3) 第二村落 第一家族・d—2sh. 6d.

(4) 第二家族・d—2sh. 6d.

(5) 第三村落 第一家族・d—3sh.

(6) 第二家族・d—3sh. 6d.

(7) 第三家族・d—3sh. 6d.

この表記の変更は、少しも整合性の増加を齎すものとは考えられないため、一見したところでは、いかなる狙いによるものか、全く理解に苦しむとしかいいようがない印象を人々に与え兼ねない。とは言え、丁寧に見ると、第三版までの表記を単純に繰り返すことをしなかったところに、やはりエンゲルスの編集者としての努力の跡を見いだすことは出来る。例えば、第一村落第五家族について児童週賃銀を見ると、前述のように「エコノミスト」は、1人が1sh. 6d., 別の1人が2sh. の賃銀を得ているという意味で、(1, 1s6d; 1, 2s) と紛らわしく書いている。表Xの英語版のようにエリナは、それを1s, 1s6d; 1s, 2s と4人分の賃銀と誤読し、そのうち前半1s, 1s6dを第一村落第五家族のもの、後半1s, 2sは第一村落第六家族のものといま一つ誤解を重ねたようである。その結果、英語版では、第一村落第五家族について1s, 1s6dの数字が挙げられることとなった。エンゲルスはこの数字を加算して、第一村落第五家族の児童週賃銀を2s6dとしたのである。そう考えると、エンゲルスが「第四版のために」に記した通りの務めを果たそうと努力していることを、知り得る。と同時に、その方式に従うならば第一村落第六家族の児童週賃銀は1s, 2sの加算値、3sでなければならないのに、エンゲルスは2sとしているという事実から、エン

—表 X—

	英 語 版	本来のエンゲルス	実際のエンゲルス
第 1 村落 第 5 家族	1s, 1s6d.	2sh. 6d.	2sh. 6d.
第 1 村落 第 6 家族	1s, 2s.	3sh.	<u>2sh.</u>
第 2 村落 第 1 家族	1s, 1s6d.	2sh. 6d.	2sh. 6d.
第 2 村落 第 2 家族	1s, 1s6d.	2sh. 6d.	2sh. 6d.
第 3 村落 第 1 家族	blank	blank	<u>3sh.</u>
第 3 村落 第 2 家族	1s, 2s.	3sh.	<u>3sh. 6d.</u>
第 3 村落 第 3 家族	1s, 2s6d.	3sh. 6d.	3sh. 6d.

ゲルスの努力にはいま一步の丹念さが欠けており拙速さが認められることも、知り得る。その丹念と拙速の度合を一覧表にしてみると、表 X ようになる。下線部分は拙速箇所。なお、表 F の第一村落第六家族の e, g はマルクスの間違いの踏襲だが、第五家族の h は第三版の誤植の残存である。

カウツキーも錯覚した

エンゲルス版の不十分性をつよく主張して新版を編んだカウツキーは、確かに多くの改善を加えたのであるが、当該箇所に関しては、表 G の通り、正確に訂正することが出来ずに終わった。

『資本論』カウツキー版 (1914 年)

- (1) 第一村落 第五家族・d—1Sh. bis 1Sh. 6P.; h—1Sh. ¼P.
- (2) 第一村落 第六家族・d—1Sh. 2P.; e—8Sh. 2p.; g—6Sh. 10p.; h—1Sh. 7½P.
- (3) 第二村落 第一家族・d—1Sh. bis 1Sh. 6P.
- (4) 第三村落 第二家族・d—1Sh. bis 2Sh.

1914 年、マルクスの没後 30 年を経て著作権が消滅したため、マルクスの著作が自由に覆刻し得ることとなった。カウツキー (Karl Kautsky, 1854—1938) はドイツ社会民主党幹部会の委嘱を受けて、一般読者に親しみ易い形の民

衆版を提供するという意図の下に、『資本論』の新版を刊行した。カウツキーは、エンゲルスが校訂した最後の版である第四版を底本とせず、マルクスが存命中に刊行した第二版を底本にした。第二版の次の版からは誤植が多く、なかには意味を変えてしまうようなものもあるからだという。さらにまた、引用箇所もできるだけ原典との照合をおこなったという (1914 年 3 月付カウツキー 編者序文)。そういう注意深い編集態度のためであろうか、問題の表記の不整合性も看過はされなかったようである。しかしながらカウツキーによって払われた注意は必ずしも十分といえるものではなかった。「ロンドン・エコノミスト」の掲げた児童週賃銀の数値、第一村落第五家族・d—1, 1s6d; 1, 2s, 第二村落 第一家族・d—1, 1s6d; 1, 1s6d, 第三村落第二家族・d—1, 2s; 1, 2s6d について、それぞれ前半分 (1, 1s6d) (1, 1s6d) (1, 2s) を、(1Sh. bis 1Sh. 6P) (1Sh. bis 1Sh. 6P.) (1Sh. bis 2Sh) と読み誤っている。さらに、後半分については、第一村落第五家族の分 (1, 2s) だけしか採り上げておらず、しかも (1Sh. 2P) と読み誤ったうえで、さらに誤って第六家族に属さしめている。そして他の家族の後半分は無視され放置されたままである。その他の項目については、第一村落第六家族 e—8Sh. 2P.; g—6Sh. 10P. は、マルクス

—表 Y—

	エコノミスト	英語版	研究所版	マル・エン全集版
第1村落 第5家族	1, 1s6d; 1, 2s	1s, 1s6d	1-1Sh 6p	1sh 6d
第6家族		1s, 2s	1-2Sh —	2sh —
第2村落 第1家族	1, 1s6d; 1, 1s6d	1s, 1s6d	1-1Sh 6p	1sh 6d
第2家族		1s, 1s6d	1-1Sh 6p	1sh 6d
第3村落 第2家族	1, 2s; 1, 2s6d	1s, 2s	1-2Sh —	2sh —
第3家族		1s, 2s6d	1-2Sh 6p	2sh 6d

の初版、二版におけると同じ間違いを、カウツキーも犯している。それだけでなく、カウツキーは、第一村落第五家族と第六家族に関して h—1Sh. $\frac{3}{4}$ P. および h—1Sh. $1\frac{1}{2}$ P. とすべきところを、単純な計算違いで 1Sh. $\frac{1}{4}$ P. および 1Sh. $7\frac{1}{2}$ P. としているのである。

アドラツキーも誤った

エンゲルス版（あるいはマイスナー版）が品切れになっていること、カウツキー版は——労働者にとって手のとどかない高い価格であることに加えて——信頼しがたい原文とマルクス主義を偽造する序文からなっていることから（1932年3月30日付のアドラツキー V. Adoratskij の序文）、アドラツキー版ないしマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版が計画された。いま問題にしている表について言えば、エリナによって英語版に加えられた改善を一步進めて、「ロンドン・エコノミスト」の表記に近くなっている。児童週賃銀について、「エコノミスト」は、(1, 1s6d; 1, 2s) を第一村落第五家族に属させているのに対して、アドラツキー版は、(1-1Sh6p) だけを第一村落第五家族に配して、(1-2Sh) は第一村落第六家族に属すると誤読している。同様のことが、第二村落第一家族と第二家族、第三村落第二家族と第三家族についてもみられる。その相違が残るだけで、他は全て「エコノミスト」の表記の通りになっている。ここまで来ると、先に見た現

行マルクス・エンゲルス全集版『資本論』の表記は、このアドラツキー版から各々の先頭部分——(1-1Sh6p) の1の部分、(1-2Sh) の1の部分——を除去して出来たものであることは、理解に難くはないであろう。児童週賃銀について、エコノミスト、英語版、研究所版、現行マルクス・エンゲルス全集版を列記すると、その間の事情は容易に判明するであろう。

こうして、初版のマルクスの表記から現行マルクス・エンゲルス全集版まで、なお誤りは払拭されてはいないながらも、減少して来たのは確かである。小さい表ながらも、この一世紀の間に、様々の人々の汗が流されてきた結果が反映されていることが読み取れるであろう。

(1983. 3. 9)

3. MEGA 版

以上の覚書をまとめた後、Marx Engels Gesamt Ausgabe 版の『資本論』第1巻が刊行された。問題の表記について、初めて原表所収の『エコノミスト』1845年3月29日号が参看され、それに基づいて、誤記の訂正がなされることとなった。(Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe Zweite Abteilung, Band 5, Apparat, S. 948-949)。

これでこの表記の整理は完了したかに思えたのであるが、しかし実際には一つだけ解せない事が生ずることとなった。というのは、

—表 I — (原表一付表 9)

[665] 第一の村落

児 童 a	家族成員数 b	大人週賃銀 c	児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e	週 家 賃 f	家賃差引後の 週賃銀 g	一人小たり 週賃銀 h
		sh.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.	sh. d.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3½
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1 6	10 6	2 —	8 6	1 0¾
3	5	7	1 2	7 —	1 4	5 8	1 1½
第 二 の 村 落							
6	8	7	1 6	10 —	1 6	8 6	1 0¾
6	8	7	1 6	7 —	1 3½	5 8½	0 8½
8	10	7	— —	7 —	1 3½	5 8½	0 7
4	6	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	0 11
3	5	7	— —	7 —	1 6½	5 5½	1 1
第 三 の 村 落							
4	6	7	— —	7 —	1 —	6 —	1 —
3	5	7	1 2	11 6	0 10	10 8	2 1½
0	2	7	1 6	5 —	1 —	4 —	2 —

(第一行の 655 は、この表記の掲載されている初版の頁数を示す。)

(下線部分は、表 E—付表 3, 4, の表記との相違点を示す。)

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) Zweite Abteilung, Band 5, 1983, S. 546

MEGA 版『資本論』第一巻に掲げられた、当該の表は、『資本論』初版 (1867 年刊行) のそれと異なるのである。

まず表記そのものを示すと表—I (付表 9) の通りである。(Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe, Zweite Abteilung, Band 5, Text, S. 546)。

『資本論』初版の表記を示した表—E (付表 3) と照合すれば、容易に判明することが、ふたつある。ひとつは、当該表記が初版において登場する頁番号、665 が明示されていること。ふたつは、にもかかわらず、表—E とは、第一村落第六家族について、「全家族週収入」と「家賃差引後の週賃銀」とが異なること、であ

る。

第一の点、つまり MEGA 版『資本論』が初版『資本論』を原典としていること、については、MEGA 版序文 (Einleitung) および編集端書 (Editorische Hinweise) でも、指摘がなされている。「MEGA のこの巻は、1867 年 9 月、ハンプルグの出版者、オットー・マイスナーによって刊行された、カール・マルクス著『資本論・経済学批判』第一巻の、初版を原典としたものを、含んでいる」(序文, s. 11*)。「この巻は、1867 年刊の『資本論』第一巻の初版の原典全体を含んでいる」(編集端書, S. 56*)。序文および編集端書の書き出しの部分に、このように明記されているのである。そ

一表 Z—

第一村落 第五家族・第六家族

児童数 a	家族成 員数 b	大人週賃銀 c		児童週賃銀 d	全 家 族 週収入 e		週 家 賃 f		家賃差引後の 週賃銀 g		一人当たり 週賃銀 h	
「エコノミスト」												
6	8	s	d	1, 1s6d; 1, 2s.	s	d	s	d	s	d	s	d
3	5	7	0		10	6	2	0	8	6	1	0¾
		7	0		7	0	1	4	5	6	1	1½
『資本論』初版												
6	8	7		1sh. 6d.	10	6	2		8	6	1	0¾
3	5	7		1sh. 2d.	8	2	1	4	6	10	1	1½
『資本論』MEGA 版												
6	8	7		1sh. 6d.	10	6	2	—	8	6	1	0¾
3	5	7		1sh. 2d.	7	—	1	4	5	8	1	1½

して、『資本論』第一巻初版においては、問題の表記は665頁に掲載されているのであるから、MEGA版において、この表記の冒頭に頁数〔665〕の記載がなされていることには、何ら不都合はない。至極当然のことである。

第二の点、つまりMEGA版『資本論』が初版『資本論』を原典としているにもかかわらず、MEGA版の問題の表記が、初版の表記と内容を異にしていることについて、どのように考えるべきか。

第一村落第五家族および第六家族に関して、「エコノミスト」誌、『資本論』初版、MEGA版の該当箇所を比較してみると、表Zの通りである。

「エコノミスト」誌は、第五家族にふたりの子供の稼ぎ手があり、ひとり、1シリング6ペンス、いまひとりは、2シリングの週賃銀を得ているとして、(1, 1s6d; 1, 2s)と記述している。第六家族には、子供の稼ぎ手はいない、という記述である。

『資本論』初版において、マルクスは二重の錯覚をしている。まず、子供の稼ぎ手ふたり

が、ひとりは第五家族に、ひとりは第六家族に分属するかの如く錯覚したのだった。次に、ふたりの子供の稼ぎ手の週賃銀について、ひとりの分は1シリング6ペンスと正しく把握しているが、ふたりめの分を、1シリング2ペンスと錯覚したのだった。こういう錯覚のうえに、マルクスは第六家族についてのみ、加減の計算を試みたのだった。大人の週賃銀7シリングに、子供の週賃銀1シリング2ペンスを加えて、8シリング2ペンスと計算した。その結果、「全家族週収入」を「エコノミスト」誌の7シリングから、8シリング2ペンスに変更したのだった。いまひとつは、この「全家族週収入」から「週家賃」を差引く計算をしている。8シリング2ペンスから1シリング4ペンスを減算して「家賃差引後の週賃銀」6シリング10ペンスを導き出した。そして「エコノミスト」誌の5シリング8ペンスを、6シリング10ペンスに変更したのだった。

『資本論』MEGA版に生じた差異は、初版のそれとの比較でいえば、マルクスのふたつの錯覚はそのまま残しながら、マルクスのふたつ

の計算の痕跡を消し取ってしまったところにある。こうして、MEGA 版は、「エコノミスト」誌の原表とも異なり、マルクスの手になる初版の表記（したがって二版、三版の表記）とも異なり、さらにエンゲルス版の表記とも、カウツキー版の表記とも、アドラツキー版の表記ともマルクス・エンゲルス全集版の表記とも異なる、六つめの誤った表記を作成していることになる。

マルクスの錯覚の跡は残しつつ、計算の跡を払拭したのは、何故か。推測の限りでしかないが、「エコノミスト」誌の原表との喰い違いを少なくすること、マルクスの誤りの個数を小さくすることが狙いであるとするならば、大変に残念であると言わねばならない。『資本論』初版のように、マルクスがただ錯覚して誤写しただけでなく、その錯覚に基いて加減の計算をしている様子が看取できる方が、マルクスもまた誤り多きひとりの人間であること（その誤り多き人間が大きな仕事をしたのであること）が、より良く理解されるはずである。MEGA 版のように、錯覚による誤写の痕跡だけを残して、計算の痕跡を消去するのは、その意味で良策とは言えないように思えるのである。

(1984・4・25)

補 記

『資本論』の統計表記のなかには、数字の誤記や項目の脱漏が相当ある。そのひとつ、『資本論』第1巻第7篇第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」第5節「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」で「イギリスの農業プロレタリアート」をとりあげて整理を試みたのが、この覚書である。

1980年夏、ロンドンのコリンディルにある新聞図書館で「エコノミスト」誌の原表をみて、余りに単純な誤記が一世以上訂正されないままで今日まで残っているのに一驚した。

私が、そのとき持参していた『資本論』は Werke 版（いわゆる全集版）だけであり、ロンドンでは『資本論』初版を参照することは出来なかった。ブリティッシュ・ミュージアムには『資本論』初版があるが、これはそのとき陳列用であり、閲覧用ではなかった。『資本論』二版は、著者マルクスの献呈本が、ブリティッシュ・ライブラリにあり、それで見ると、いわゆる全集版とは異なる表記がなされていることが分った。当時訪英中の山口重克氏（東京大学・経済学）が、帰国後、初版の表記の写しを送って下さり、二版のそれと同じであることを知りえた。

1980年秋、大陸旅行からイギリスに帰ってみると、大内力先生から御便りが届いており、そのなかで、この表記の、いわゆる全集版、初版、三版、エンゲルス版、カウツキー版、アドラツキー版（研究所版）、仏訳初版、英訳イーヴリング版における相違の指摘がなされていた。「こう並べてみると、この表は版ごとに異動が多くて、どこでどう間違ったのか謎のようです。」との感想も書き加えられていた。

同じ頃、バリ出張中の田中治男氏（東京外国語大学・政治学）からは、仏訳 Édition Sociale では、第一村落と第三村落については正確に訂正されているが、第二村落については訂正個所が1行ずれていて不正確である旨、知らせていただいた。

ロンドンに持参していた邦訳書は、岡崎次郎訳・国民文庫版であったが、この版では、いわゆる全集版に基きながらも、「一人あたり週賃銀」を表現するのに、原書は分数を用いているのに対して、小数が用いられている。分数であれば概数として通用するとき、小数で表現すると概数としての雰囲気が消えるという微妙な差異が生ずる。例えば、第一村落第六家族で「家賃差引後の週賃銀」は5シリング8ペンスであり、「家族員数」は5人であるから、「一人あたり週賃銀」は、細かく言えば、1シリング1%ペンス（分数方式）あるいは1シリング1.6ペンス（小数方式）となる。「エコノミスト」誌は、これを、1シリング1½ペンスと表示している。「½」は「%」の概数であると考えられることができるし、貨幣の存在を念頭におくと、「½ペンス貨」の可能性が「%ペンス貨」の可能性より遥かに大きいから、「½ペンス」という表示が「%ペンス」という表示より便利でもあるだろう。したがって、「エコノミスト」誌が、そして『資本論』原書が、細かく言えば1シリング1%ペンスとなるところを、1シリング1½ペンスと表現したとしても、それ

を誤りとしてしりぞけるわけにはいかないだろう。ところが、小数を用いて、細かく言えば1 シリング 1.6 ペンスとなるものを、1 シリング 1.5 ペンスと表現すると、概数としての印象が薄くなり、貨幣との繋がりも疎遠になる。そういう意味で、国民文庫版の表記は、「エコノミスト」誌の原表から、さらに一步誤記の程度が大きくなったのではないか、という感じを、私は強めていた。

その頃、小沢健二氏（農林水産省農業総合研究所・経済学）から、長谷部文雄訳・河出書房版の複写を

お送りいただいた。故・長谷部氏は、「ロシア語版、1953年、にしたがって、数カ所にわたり訂正した。」と註記して、この表記を正確に訂正しておられることを、知りえたのである。（近年の邦訳書では、新日本出版社版では正確な訂正がなされ、江夏・上杉訳『フランス語版資本論』ではエディシオン・ソシアル版を踏襲して、不正確な訂正に終わっている）。

以上のように、英国出張中に恩師先輩友人から教えていただいた事柄の重なりが小稿とりまとめの機縁になっている。ここに記して謝意を表したい。

付表 1 現行マルクス・エンゲルス全集版『資本論』

Kinder	Zahl der Familienglieder	Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer	Wöchentlicher Kinderlohn	Wocheneinnahme der Gesamtfamilie	Wöchentliche Hausmiete	Gesamtwochenlohn nach Abzug der Hausmiete	Wochenlohn per Kopf					
a	b	c	d	e	f	g	h					
Erstes Dorf												
		sh.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.		
2	4	8	—	—	8	—	2	—	6	—	1	6
3	5	8	—	—	8	—	1	6	6	6	1	3 ¹ / ₂
2	4	8	—	—	8	—	1	—	7	—	1	9
2	4	8	—	—	8	—	1	—	7	—	1	9
6	8	7	1	6	10	6	2	—	8	6	1	3 ³ / ₄
3	5	7	2	—	7	—	1	4	5	8	1	1 ¹ / ₂
Zweites Dorf												
		sh.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.
6	8	7	1	6	10	—	1	6	8	6	1	3 ³ / ₄
6	8	7	1	6	7	—	1	3 ¹ / ₂	5	8 ¹ / ₂	—	8 ¹ / ₂
8	10	7	—	—	7	—	1	3 ¹ / ₂	5	8 ¹ / ₂	—	7
4	6	7	—	—	7	—	1	6 ¹ / ₂	5	5 ¹ / ₂	—	11
3	5	7	—	—	7	—	1	6 ¹ / ₂	5	5 ¹ / ₂	1	1
Drittes Dorf												
		sh.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.	sh.	d.
4	6	7	—	—	7	—	1	—	6	—	1	—
3	5	7	2	—	11	6	—	10	10	8	2	1 ¹ / ₂
0	2	5	2	6	5	—	1	—	4	—	2	— ¹⁴⁰

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 23, 1962, S. 705:

付表 2. 「ロンドン・エコノミスト」1845年3月29日号290頁。

WAGES OF AGRICULTURAL LABOURERS.

(From the Morning Chronicle.)

A correspondent has transmitted us the following table of wages received by several agricultural labourers in three villages in the neighbourhood of Blandford, Wimbourne, and Poole. The villages are on the property of Mr G. Bankes and the Earl of Shaftesbury. Our correspondent is acquainted with the name and place of abode of every person whose income he describes, but, for obvious reasons, he only mentions the initials of the names. He assures us moreover that these examples are not selected, but, taken promiscuously, and may be regarded as a fair average. With these remarks we lay his table before our readers, and were it not that the great distress of the industrious and careful peasantry of England has been of late much discoursed about and generally admitted, this table would be calculated to excite astonishment and, perhaps, indignation :—

Initials of men's names, all married.	Children.	Whole family.	Men's Wages.	Children's wages.	Earnings of whole family.	Rent.	Whole amount after rent is paid.	No. of people to support.	Amount to support each individual per week.
FIRST VILLAGE S									
H. M.	2	4	3 0		8 0	2 0	6 0	4	1 6
H. K.	3	5	3 0		3 0	1 6	6 6	5	1 3½
R. Y.	2	4	8 0		8 0	1 0	7 0	4	1 9
P. C.	2	4	8 0		8 0	1 0	7 0	4	1 9
R. K.	6	8	7 0	1, 1s 6d; 1, 2s	10 6	2 0	8 6	8	1 0½
J. J.	3	5	7 0		7 0	1 4	5 8	5	1 1½
SECOND VILLAGE S									
R. T.	6	8	7 0	1, 1s 6d; 1, 1s 6d	10 0	1 6	8 6	8	1 0½
G. S.	6	8	7 0		7 0	1 3½	5 8½	8	0 8½
J. L.	8	10	7 0		7 0	1 3½	5 8½	10	0 7
J. S.	4	6	7 0		7 0	1 6½	5 5½	6	0 11
T. S.	3	5	7 0		7 0	1 6½	5 5½	5	1 1
THIRD VILLAGE S									
H. A.	4	6	7 0		7 0	1 0	6 0	6	1 0
T. B.	3	5	7 0	1, 2s; 1, 2s 6d	11 6	0 10	10 8	5	2 1½
J. D.	0	2	5 0		5 0	1 0	4 0	2	2 0

The Economist, March 29. 1845, p. 290.

付表 3. 初版『資本論』(1867年)

665

Erstes Dorf.

a) Kinder.	b) Zahl der Familienglieder.	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer.	d) Wöchentlicher Kinderlohn.	e) Wocheneinnahme der Gesamtfamilie.	f) Wöchentliche Hausmiethe.	g) Gesamt-wochenlohn nach Abzug der Hausmiethe.	h) Wochenlohn per Kopf.
2	4	8 sh.		8 sh.	2 sh.	6 sh.	1 sh. 6 d.
3	5	8 sh.		8 sh.	1 sh. 6 d.	6 sh. 6 d.	1 sh. 3 1/2 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh. 6 d.	2 sh.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 3/4 d.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	8 sh. 2 d.	1 sh. 4 d.	6 sh. 10 d.	1 sh. 1 1/2 d.

Zweites Dorf.

6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh.	1 sh. 6 d.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 3/4 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 8 1/2 d.
8	10	7 sh.		7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 7 d.
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	0 sh. 11 d.
3	5	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	1 sh. 1 d.

Drittes Dorf.

4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh.	6 sh.	1 sh.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	11 sh. 6 d.	0 sh. 10 d.	10 sh. 8 d.	2 sh. 1 1/2 d.
0	2	5 sh.	1 sh. 6 d.	5 sh.	1 sh.	4 sh.	2 sh. 1 1/2 d.

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band; Erste Auflage, 1867, S. 665.

付表 4. 二版『資本論』(1872 年)

Erstes Dorf.

a) Kinder.	b) Zahl der Familienglieder.	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer.	d) Wöchentlicher Kinderlohn.	e) Wocheneinnahme der Gesamtfamilie.	f) Wöchentliche Hausmiete.	g) Gesamt-wochenlohn nach Abzug der Hausmiete.	h) Wochenlohn per Kopf.
2	4	8 sh.		8 sh.	2 sh.	6 sh.	1 sh. 6 d.
3	5	8 sh.		8 sh.	1 sh. 6 d.	6 sh. 6 d.	1 sh. 3 1/2 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh. 6 d.	2 sh.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 3/4 d.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	8 sh. 2 d.	1 sh. 4 d.	6 sh. 10 d.	1 sh. 1 1/2 d.

I. 45

a) Kinder.	b) Zahl der Familienglieder.	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer.	d) Wöchentlicher Kinderlohn.	e) Wocheneinnahme der Gesamtfamilie.	f) Wöchentliche Hausmiete.	g) Gesamt-wochenlohn nach Abzug der Hausmiete.	h) Wochenlohn per Kopf.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh.	1 sh. 6 d.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 3/4 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 8 1/2 d.
8	10	7 sh.		7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 7 d.
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	0 sh. 11 d.
3	5	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	1 sh. 1 d.

Drittes Dorf.

4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh.	6 sh.	1 sh.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	11 sh. 6 d.	0 sh. 10 d.	10 sh. 8 d.	2 sh. 1 1/2 d.
0	2	5 sh.	1 sh. 6 d.	5 sh.	1 sh.	4 sh.	2 sh. 1/2 d.

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band; Zweite Auflage, 1872, S. 705-706

付表 5. 三版『資本論』(1883年)

Erstes Dorf.

a) Kinder.	b) Zahl der Familienglieder.	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer.	d) Wöchentlicher Kinderlohn.	e) Wocheneinnahme der Gesamtfamilie.	f) Wöchentliche Hausmiete.	g) Gesamt- wochenlohn nach Abzug der Haus- miete.	h) Wochenlohn per Kopf.
2	4	8 sh.		8 sh.	2 sh.	6 sh.	1 sh. 6 d.
3	5	8 sh.		8 sh.	1 sh. 6 d.	6 sh. 6 d.	1 sh. 3 ¹ / ₂ d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh. 6 d.	2 sh.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 ³ / ₄ d.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	8 sh. 2 d.	1 sh. 4 d.	6 sh. 10 d.	1 sh. 1 ¹ / ₂ d.

Zweites Dorf.

6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh.	1 sh. 6 d.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 ³ / ₄ d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	7 sh.	1 sh. 3 ¹ / ₂ d.	5 sh. 8 ¹ / ₂ d.	0 sh. 8 ¹ / ₂ d.
8	10	7 sh.		7 sh.	1 sh. 3 ¹ / ₂ d.	5 sh. 8 ¹ / ₂ d.	0 sh. 7 d.
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 ¹ / ₂ d.	5 sh. 5 ¹ / ₂ d.	0 sh. 11 d.
3	5	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 ¹ / ₂ d.	5 sh. 5 ¹ / ₂ d.	1 sh. 1 d.

Drittes Dorf.

4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh.	6 sh.	1 sh.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	11 sh. 6 d.	0 sh. 10 d.	10 sh. 8 d.	2 sh. 1 ¹ / ₂ d.
0	2	5 sh.	1 sh. 6 d.	5 sh.	1 sh.	4 sh.	2 sh. 1 ⁴⁰ / ₂ d.

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band; Dritte Auflage, 1883, S. 698

付表 6 四版『資本論』(1890 年)

Erstes Dorf.

a) Kinder.	b) Zahl der Familienglieder.	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer.	d) Wöchentlicher Kinderlohn.	e) Wocheneinnahme der Gesamtfamilie.	f) Wöchentliche Hausmiete.	g) Gesamt- wochenlohn nach Abzug der Haus- miete.	h) Wochenlohn per Kopf.
2	4	8 sh.		8 sh.	2 sh.	6 sh.	1 sh. 6 d.
3	5	8 sh.		8 sh.	1 sh. 6 d.	6 sh. 6 d.	1 sh. 3 ¹ / ₃ d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
6	8	7 sh.	2 sh. 6 d.	10 sh. 6 d.	2 sh.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 ² / ₄ d.
3	5	7 sh.	2 sh.	8 sh. 2 d.	1 sh. 4 d.	6 sh. 10 d.	1 sh. 1 ¹ / ₃ d.

— 643 —

Zweites Dorf.

6	8	7 sh.	2 sh. 6 d.	10 sh.	1 sh. 6 d.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 ² / ₄ d.
6	8	7 sh.	2 sh. 6 d.	7 sh.	1 sh. 3 ¹ / ₃ d.	5 sh. 8 ¹ / ₃ d.	0 sh. 8 ¹ / ₃ d.
8	10	7 sh.		7 sh.	1 sh. 3 ¹ / ₃ d.	5 sh. 8 ¹ / ₃ d.	0 sh. 7 d.
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 ¹ / ₃ d.	5 sh. 5 ¹ / ₃ d.	0 sh. 11 d.
3	5	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 ¹ / ₃ d.	5 sh. 5 ¹ / ₃ d.	1 sh. 1 d.

Drittes Dorf.

4	6	7 sh.	3 sh.	7 sh.	1 sh.	6 sh.	1 sh.
3	5	7 sh.	3 sh. 6 d.	11 sh. 6 d.	0 sh. 10 d.	10 sh. 8 d.	2 sh. 1 ¹ / ₃ d.
0	2	5 sh.	3 sh. 6 d.	5 sh.	1 sh.	4 sh.	2 sh. ¹⁴⁶ / ₃ d.

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Vierte Auflage, Herausgegeben von Friedrich Engels, 1890, S. 642-643

付表 7. カウツキー版『資本論』(1914年)

Kinder	Zahl der Familienglieder	Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer	Wöchentlicher Kinderlohn	Wochen-einnahme der Gesamt-familie	Wöchentliche Hausmiete	Gesamt-wochenlohn nach Abzug der Hausmiete	Wochenlohn pro Kopf
a	b	c	d	e	f	g	h
Erstes Dorf.							
2	4	8Sh.	—	8Sh.	2Sh.	6Sh.	1 Sh. 6 P
3	5	8 "	—	8 "	1 " 6 P.	6 " 6 P.	1 " 3½ "
2	4	8 "	—	8 "	1 "	7 "	1 " 9 "
2	4	8 "	—	8 "	1 "	7 "	1 " 9 "
6	8	7 "	1 Sh. bis 1 Sh. 6 P.	10 " 6 P.	2 "	8 " 6 P.	1 " ½ "
3	5	7 "	1 " 2 P.	8 " 2 "	1 " 4 P.	6 " 10 "	1 " 7½ "
Zweites Dorf.							
6	8	7Sh.	1 Sh. bis 1 Sh. 6 P.	10Sh.	1 Sh. 6 P.	8 Sh. 6 P.	1 Sh. ¾ P.
6	8	7 "	—	7 "	1 " 3½ "	5 " 8½ "	— " 8½ "
8	10	7 "	—	7 "	1 " 3½ "	5 " 8½ "	— " 7 "
4	6	7 "	—	7 "	1 " 6½ "	5 " 5½ "	— " 11 "
3	5	7 "	—	7 "	1 " 6½ "	5 " 5½ "	1 " 1 "
Drittes Dorf.							
4	6	7Sh.	—	7Sh.	1 Sh.	6 Sh.	1 Sh.
3	5	7 "	1 Sh. bis 2 Sh.	11 " 6 P.	— " 10 P.	10 " 8 P.	2 " 1½ P.
—	2	5 "	—	5 "	1 "	4 "	2 "

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Volksausgabe, Herausgegeben von Karl Kautsky, 1914, S. 612.

付表 8. アドラツキー版『資本論』(1932年)

Kinder	Zahl der Familien-glieder	Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer	Wöchentlicher Kinderlohn	Wochenlohn der Gesamtfamilie	Wöchentliche Hausmiete	Gesamtwochenlohn nach Abzug der Hausmiete	Wochenlohn per Kopf
a	b	c	d	e	f	g	h
<i>Erstes Dorf</i>							
		Sch.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.
2	4	8	— —	8 —	2 —	6 —	1 6—
3	5	8	— —	8 —	1 6	6 6	1 3 ¹ / ₂
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
2	4	8	— —	8 —	1 —	7 —	1 9
6	8	7	1—1 6	10 6	2 —	8 6	1 1 ¹ / ₄
3	5	7	1—2 —	7 —	1 4	5 8	1 1 ¹ / ₂
a	b c	d	e	f	g	h	
<i>Zweites Dorf</i>							
	Sch.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	
6	8 7	1—1 6	10 —	6 6	8 6	1	3 ³ / ₄
6	8 7	1—1 6	7 —	1 3 ¹ / ₂	5 8 ¹ / ₂	—	8 ¹ / ₂
8	10 7	— —	7 —	1 3 ¹ / ₂	5 8 ¹ / ₂	—	7
4	6 7	— —	7 —	1 6 ¹ / ₂	5 5 ¹ / ₂	—	1
3	5 7	— —	7 —	1 6 ¹ / ₂	5 5 ¹ / ₂	1	1
<i>Drittes Dorf</i>							
	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	Sch. P.	
4	6 7	— —	7 —	1 —	6 —	1	—
3	5 7	1—2 —	11 6	— 10	10 8	2	1 ¹ / ₂
0	2 5	1—2 6	5 —	1 —	4 —	2 ¹ / ₄	—

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Volksausgabe, Herausgegeben von Friedrich Engels, Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, 1932, S. 713-714.

付表 9. MEGA 版『資本論』(1983年)

[665] Erstes Dorf							
a) Kinder	b) Zahl der Familien-glieder	c) Wöchentlicher Arbeitslohn der Männer	d) Wöchentlicher Kinderlohn	e) Wochen-einnahme der Gesamt-familie	f) Wöchentliche Hausmiethe	g) Gesamt-wochenlohn nach Abzug der Hausmiethe	h) Wochenlohn per Kopf
2	4	8 sh.		8 sh.	2 sh.	6 sh.	1 sh. 6 d.
3	5	8 sh.		8 sh.	1 sh. 6 d.	6 sh. 6 d.	1 sh. 3 1/2 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
2	4	8 sh.		8 sh.	1 sh.	7 sh.	1 sh. 9 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh. 6 d.	2 sh.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 3/4 d.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	7 sh.	1 sh. 4 d.	5 sh. 8 d.	1 sh. 1 1/2 d.
Zweites Dorf							
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	10 sh.	1 sh. 6 d.	8 sh. 6 d.	1 sh. 0 1/4 d.
6	8	7 sh.	1 sh. 6 d.	7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 8 1/2 d.
8	10	7 sh.		7 sh.	1 sh. 3 1/2 d.	5 sh. 8 1/2 d.	0 sh. 7 d.
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	0 sh. 11 d.
3	5	7 sh.		7 sh.	1 sh. 6 1/2 d.	5 sh. 5 1/2 d.	1 sh. 1 d.
Drittes Dorf							
4	6	7 sh.		7 sh.	1 sh.	6 sh.	1 sh.
3	5	7 sh.	1 sh. 2 d.	11 sh. 6 d.	0 sh. 10 d.	10 sh. 8 d.	2 sh. 1 1/2 d.
0	2	5 sh.	1 sh. 6 d.	5 sh.	1 sh.	4 sh.	2 sh. 1 1/2 d.

¹⁴⁶⁾ London „Economist“. Jahrgang 1845, p. 290.

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe, Zweite Abteilung, Band 5, Text, S. 546.